

NHKさえ票読みで二転三転

都議選大敗北の自民党と「小池劇場」の進軍ラッパ

政治ジャーナリスト 鈴木哲夫

したたかに仕掛けた選挙戦略

「申し訳ないが、安倍総理の応援は遠慮してもらった方がいいかもしれない」（自民党都議選ベテラン候補）

「ポスターを貼ってもらうのに、安倍総理の顔が入った自民党ポスターは断られました」（23区自民党候補運動員）

5年間、高い支持率をキープしてきた安倍政権にとっては、初めての反応だろう。

7月2日に投開票された東京都議会議員選挙は、単なる一地方選挙という次元を超えて、安倍政権の潮目が変わるかもしれない、重大な結果となった。誰も予測できない、自民党の「歴史的な大敗北」と言ってもいいだろう。

投票日の当日、かなり詳細な出口調査を行っていたNHKは、あまりの自民党の投票の低さを知り、内部の当落判定会議で「40議席を割るところか20議席台もと」と、一旦予測を弾き出したが、「いや、まさかそこ

まで負けるとは信じられないと、再び予測を上方修正したほどだった。

しかし、結果はやはり劇的。自民党は改選前57議席の半数以下の23議席しか獲得できず、第一会派の座から転落した。

人気の小池百合子都知事が率いる都民ファースト（以下ファースト）の獲得議席は、追加公認含めて55議席。

小池知事と協力関係の公明党などを合わせて、小池派の勢力は都議会定数127の内、過半数を優に越えた。

もはや議会は小池知事の意のまま、自民党も抵抗の術を失った。

勝因は、半分はもちろん小池人気と、小池知事がしたたかに仕掛けて来た選挙戦略にあった。昨年の夏に

登場した小池知事は、それまで長く都議会を支配し、都庁行政を巻き込んで存在感を示して来た都議会自民党と対峙し続けた。

今回の都議選は、その激しい対立を反映し、常に攻守とを代えて来た。

年明けには、小池知事を支援する

ファーストが60議席にも届く、との各種世論調査結果が出たかと思えば、自民党が3月議会を機に豊洲新市場移転問題を取り上げて、「決められない知事」キャンペーンを展開し、GW明けの調査では何と自民党が議席でトップに。

しかし、ここで小池知事が再び反撃に出る。

何かの時に使えるとの判断で、そのままにして来た自民党籍を離脱して、自らファーストの代表に就任し、知事自身の高い支持率を、そのままファーストの知名度アップに合体させて大成功したのだ。

「自民党は、組織票は固めたが、その後の無党派層の取り込みには苦戦した。空中戦は圧倒的に小池知事の独壇場。最終日の最後の演説を八丈島でやることを決めるなんて、今まで聞いたことがない（結局、天候不良のため飛行機が飛ばず中止になったが……）。

普通は大票田の都心のと真ん中で、ワーツと盛り上がって終わるが、東京



注目の千代田区（1議席）に立候補の「都民ファーストの会」樋口高
額貴候補（当選）の応援に駆け付けた小池氏（樋口氏HP）

の端から端まで住んでいる人を大事にしたい、というアピール。その辺りの話題性作りや発想にははつきり言っ
て敵わない」（自民党都連幹部）
自身が回った街頭演説は1001カ所
に上った。これによって新人の多いファ
ースト候補も有権者に浸透し、50人
候補の内49人が当選する快挙となっ
た。

「THIS」より深刻な問題
だが、ファーストの勝因と自民党の

大敗の要因の内、半分はこうした小
池知事自身だったとしても、もう半
分が大問題なのだ。

「いや、小池知事以上に勝敗に影響
を与えたのが安倍政権、与党自民党
が犯した罪と言っているかもしれない。
「THIS」敗因だ」と自民党ベテラン
議員が言ったという。

「THIS」は名前の頭文字だ。T
は秘書に暴言、暴行をはたらいたと
される豊田真由子議員。Hは加計学
園の獣医学部承認問題で、文書に名

前が取り沙汰された萩生田光一官
房副長官。Iは「自衛隊も応援して
いる」と政治的中立を侵して選挙応
援した稲田朋美防衛相。Sは加計学
園から違法献金疑惑を報じられた
下村博文自民党都連会長。これらが
有権者を怒らせ、非自民の投票行
動に出たというのだ。

だが、自民党の落選したベテラン都
議は、「THIS」のベースには、もっと
深刻な問題があったと話す。

「元々は森友学園の国有地問題に
始まり、加計学園の処理に至るまで、
安倍首相や官邸はあまりにも不誠
実。特に、加計問題は強引に国会
を閉じるなどして、都議選に入る前
にすでに内閣支持率は落ち始めてい
た。THIS以前に、危機管理など
で完全に世論をナメていた。一強の
驕りだ」

東京は無党派が多く投票行動は時
の風に左右されやすい。さらに流動
人口も多い。

転勤などで、例えば、都議の任期
4年で半分近くも人口が入れ替わる
地域もあるほどだ。

「これらの有権者には地域の争点や
公約はあまり関係ない。彼らは、国
政や政治全体のテーマなどで投票す

る傾向が強い。今回は、彼らが明ら
かに安倍政権への批判で投票した」
（自民党都連幹部）

私も、そうした空気を感じたのが、
投票前日の最後のお願ひ。逆風を意
識して、自民党は安倍首相の街頭演
説を封印して来たが、最終日に秋葉
原駅前の候補応援で街頭に立った。

この時、反安倍を唱える人達が太
拳して駅前に詰めかけ、安倍首相の
演説中に、「安倍辞めろ」「安倍帰れ」
とシュプレヒコールを上げる騒ぎとな
った。首相も「こういう人達には負
けていけない」と応戦。異例の光
景は大きなニュースにもなった。

その一角で取材していた私は、しか
し、その喧騒よりも別のことに気づ
いた。

集まった聴衆に対して、自民党の運
動員がいつものように紙製の日の丸の
手旗を渡していたのだが、これが充
分にはけずに大量に残っていたのだ
た。

秋葉原は、安倍首相が2012年
に政権に返り咲いた選挙で街頭演説
して最高の盛り上がりを見せた場所。
その後も、安倍首相にとっては、選
挙の重要な局面で何度もこの場所に
立ち常に多くの聴衆を集め、秋葉原



秋葉原駅前で応援演説に挑んだ安倍首相だが、観衆からはブーイングの嵐が（中村あや氏HP）

「こんなに余ってしまいました」——顔見知りの運動員は私にそう言つて、手に握ったままの余った小旗を見せた。潮目が変わつて来たことは、そんなところにも垣間見えた。

国政を射程に収めた小池知事

自民党の安倍首相に距離を置くりベラル派のベテラン議員は、「今回の敗戦で安倍首相にもモノ申す空気が出て来る。憲法改正のスケジュールや来年の総裁選の3選で、党内のコンセンサスにも影響が出て、安倍シナリオがうまく行くかどうか分からなくなる」と話す。

そして、東京都議選は過去を見れば分かる通り、必ず国政に直結する。今回の都議選を踏まえ俄然注目されるのは、国政のステージだ。

必ず「小池新党」の動きが出ると言うのは、自民党選対幹部議員。その理由は、なるほど明快で説得力がある。

「今回の選挙で、ファーストの得票は何と約200万票。じゃあ国政選挙ではどこに投票するのかという投票先がない。ならば、その受け皿を作るべきという議論に絶対になる。小池新党は必然的に作られる。次

期総選挙に小池さん自身が打つて出ることはないが、自民党に離党届を出している盟友の若狭勝衆議院議員が中心的な役割を果たして、東京の25の小選挙区や比例で候補を擁立する」（ファースト幹部）

さらに、小池新党待望組がいると言う。

「現職の国会議員で渡辺喜美参議院議員や、民進党を離党した長島昭久衆議院議員、同じく民進党と距離を置き始めている柿沢未都衆議院議員らは、小池知事と政治勢力を結集させることに前向きです。また、都議選でファーストの応援にわざわざやつて来た、減税日本の河村たかし名古屋市長は、小池知事と一緒に国政政党を立ち上げて日本の統治の仕組みを変えようというのが一貫した主張です。現職者が政党要件の5人集まつて、先に新党を立ち上げるケースも想定できます。また、総選挙では河村氏の名古屋の他、九州や東北でも小池知事のシンパの元議員らが動いている他、関西では特に兵庫などを中心に新党参加希望者がいると聞いています。第三極の政治姿勢で行くことになると思います」（同都議）

に訪れている若者らに大声援を受ける聖地だった。皆が、運動員の配る目の丸を受け取り、安倍首相の演説に合わせて振

つて来た。その「目の丸」が、この都議選のこの時ばかりはさうばかりはけなかったのだ。

強まる自公間の「すきま風」

この他、小池新党を加速させるような外的要因も加わっている。1つは今回の都議選で生じた「自公」の隙間だ。実は都議選の中盤に入り、こんなことが起きた。前述したT H I Sなどで、有権者が示した反応は、思わぬ方向に向いたのだった。

公明党幹部が言う。

「公明党は23人の候補を出し都議選は全員当選が命題。なのに、中盤に入り、北区、中野区、豊島区、北多摩3の4つの選挙区で各種世論調査などで赤ランプがついた。代わりが上がって来たのが、何とうちと競っていた共産党候補。東京は無党派が多く共産党へのアレルギーも少ない。そういう人達は、政権批判票は共産党へ流れる傾向があるので、自民党政権の失態なのにツケが回っ



「小池新党」に合流すると噂される国会議員として、すでに渡辺喜美氏（上）、長島昭久氏（中）、柿沢未都氏の名が挙がり始めている



国政で公明党が自民党と距離を置く懸念も

て来た。ふざけるな、いい加減にしろ、という自民党に対して、相当強い不信感が選挙期間中に生まれましたね」

公明党は底力を見せ、この赤ランプの4選挙区の候補を最後はきつちりと押し上げ全員当選を果たしたが、「自民党のせいで苦戦したという思いは強い」（同幹部）という。

また、今回公明党は必勝を期すために、人気の小池知事と選挙協力し自民党との連携を絶つた。これについては、自民党都連幹部は「中央は自公連立だが、次の総選挙でしこりは残つてギスギスする」、前出公明党幹部も、「関係修復には時間がかかる」と明言した。

こうした自公の状況は、小池知事サイドから見れば「次の総選挙は自公の盤石な選挙協力は崩れる。ファーストが候補を立てれば勝てる」と勝機ができたというわけだ。

つけ加えるなら、この自公の溝は都議会レベルでも小池知事に優位だ。公明党は、今後も自民党と距離を置き、「都議会では小池知事に近づき、都政のキャスティングボートを握る選択をするしかない」（ファースト幹部）と見られるからだ。

一方、都政の課題では「築地問題」が再燃する可能性が高い。小池知事側近の1人が明かす。

「都議選前に小池知事が豊洲と築地について併用を発表した。多くの人々が、どちらかずつの結論と批判しているが、豊洲の流れが強まる中で、逆に築地を何だかんだ理由をつけてでも、可能性をよく残したという見方が正解だ。選挙が終わったら時間をかけて、小池知事は築地再整備場合によつては豊洲から再び築地に戻すような大胆な手を考えるのではないかな。なぜなら、築地再整備は小

池知事がずっとこだわって来たところだからだ。都議会で築地問題が激しく再燃する」

安倍首相は、麻生太郎副総理兼財務相や菅義偉官房長官らと結束を再確認し、「緩みを反省して出直す」旨を明らかにしたが、加計問題の処理をどうするか、また起死回生の内閣改造などで果たして刷新できるのか、これまでも下がった支持率を跳ね返して来た外交などをどう展開するか……。都議選ショックはまだまだ確実に尾を引く。

もはや「知事vs都議会」といった地方選挙の次元を超えて、「小池劇場」は次の国政のステージへと着実に駒が進んだ。